

明治38年（1905）に始まり、当初は24日の地蔵盆に行ったが、近年は8月23日、24日の2日間行われ、京都の夏の風物詩となっている。また、これらに加えて、化野念仏寺付近で愛宕古道街道灯しが同じ日に行われる。愛宕神社一の鳥居から祇王寺までの街道筋に、およそ500を数える提灯が灯され幻想的な世界が演出される。

(ウ) 愛宕街道に見る歴史的風致

このように、愛宕街道においては、通夜祭をはじめとする愛宕詣での営みや、その街道沿いにおいて行われる様々な祭礼が、寺社等の歴史的建造物や街道沿いの町並み、また信仰の山の風景と一体となって、厳かでありながらも人々の信仰とともに親しまれてきた参詣道としての街道の風情を、今もなお感じることができる。

カ 鳥羽街道



図2-73 鳥羽街道

鳥羽街道は、淀から始まり、鴨川、西高瀬川の東に沿って鳥羽離宮跡のそばにある小枝橋を北上し、平安京の表玄関であったかつての羅城門まで続く道である。平安京建設と並行して作られた「鳥羽作り道」が鳥羽街道として受け継がれた。そして、平安京が建設された時、都の南方に鎮まり国の守護とさ

れたのが、城南宮である。現在では、方除け大祭や曲水の宴などの年中行事が行われる。

鳥羽街道は陸路であるが、納所や横大路あたりで西国からの水路と結ばれていことから、このあたりは運送業者や宿屋が軒を並べ大いに賑わいをみせていた。また、この街道沿いには上鳥羽村や下鳥羽村という集落なども形成され、現在でもこれらの界限には歴史的建造物である農家や町家などが残っており、当時の面影を残している。これらの農家は町続きの街道沿いの農家住宅であり、建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅が形成されてきたと考えられる。

街道の両側の民家は、少し高い石段の上に建てられている。上鳥羽から下鳥羽にかかる、鴨川、桂川、西高瀬川の合流地点で、大雨となると川が溢れたからである。また、古くは京の伝統野菜である九条葱や壬生菜などの野菜が多く採れたが、それは水つきによって土地が肥えていたためだと言われている。

また、平安京の南部に当たる地域は、水運業の発展や豊かな質の高い伏流水に恵まれていたこともあり、かつての下鳥羽村の集落が形成されていた地の街道沿いでは、創業300年余りの最も古い歴史を持つ蔵元の一つである増田徳兵衛商店などが、酒蔵や主屋の軒を並べている。ここでは、現在でも酒造が行われており、軒下に吊るされた杉玉が酒造りの家としての風情を醸し出している。

また、ここは、かつては京から大阪や西国の地へ赴く「お公卿さん」達の中宿もつとめた由緒ある旧家でもある。

このように、鳥羽街道では、街道沿いの民家において古くから行われ、今なお続けられる営みが、歴史的な町並みと一体となって、行き交う人々に、趣きある往時の街道の姿を今に感じさせている。



写真2-125 鳥羽街道と増田徳兵衛商店